
さよならを知らない世界

香喃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さよならを知らない世界

【Nコード】

N1077Z

【作者名】

香喃

【あらすじ】

「ただいま」

今もまだその言葉を待ってる。

次目覚めたときもきっと、愛しき（かなしき）君に光あれとただ願うから。

説明

この小説は摩訶不思議ッ！？女子高生の魔法生活を読んでからみることをお勧めします。

この小説は、おもに題名から内容をつくっています。

全て短編小説です。

沙捲が死去する前のお話です。

ついでに言ってしまうと、スランプ回避用の小説なので更新はまちまちで、更新した日は「あ、スランプなんだ」と思ってください・・・

たまに詩の様なものが入りますが下手くそなのは自分でも分かっていますので（笑）そういうのが嫌な方は回避してください。でも本編になんら影響はありません。

大切な失くしもの（前書き）

これは摩訶不思議女子高生の魔法生活の香喃と沙捲の思い出です。
先に本編を読んでから見る事をお勧めします。

大切な失くしもの

小さな小さな思い出を　両手いっぱいには拾い集めて　空も驚く色を描くよ

こぼれた言葉、失くした思い、消えた意思さえかき集めるから

そして次目覚めた時もきつと

君に光あれとただ願うから

だって貴方が消えたあの日から、涙におぼれたあの日から、

「ただいま」

今もまだ、その言葉を待ってる

忘れがたきあなたの面影。

さよならなんて知らなくていい。

幻想色の時間の中であなたは生きてる

眠りつづけたあなたの思いが、私の中で芽吹き始めた。

夕陽の前でくるり舞う

夕陽の前でくるり舞う

「・・・いつまでもなにしてんだよ？」

そう言われ香喃は慌てて振り向いた。

「あー・・・えっと、ほら見てくださいって」

「？」

香喃が指さす方には丘の向こうへと沈む陽があつた。

「魔界っていつも夜じゃないですか。だから逆に新鮮だなあって」

「・・・まあな。」

そう言った横顔が西日で真っ赤になって目がくらむ。

「え？」

思わず声が出た。

一瞬、沙捲が消えたように見えた。

きつと光のせいだと思ふのだがとてつもなく不安になった。

「どうした」

「いえ、なんでも・・・」

沙捲は夕日から眼をうつした。声を聞いて香喃は少しほっとした思
いだった。

黒いコンタクトレンズに夕日が反射して赤く染まる。

香喃は不安に対するごまかしも込めて、コンタクトをはずした方が
綺麗だと言う。

でもこれは本心だ。

一瞬驚いたように瞬きし、沙捲はばーか、と苦笑交じりに言った。
そして子供の頭を撫ぜるように香喃の髪をなでる。

「・・・よっててくか？」

「どこにです・・・？」

「丘だよ。」

既に陽は沈み、赤紫色の雲が名残惜しそうに浮かんでいるだけだ。

「でももう沈みましたよ？」

「丘に隠れただけだろ。まだ見えるぞ」

そういつてさつさとしてしまった沙捲を追いかけるようにして香喃はついて行った。

丘を登ると沙捲の言った通りまだ陽は落ち切っていなかった。

既に座っていた沙捲に習いスカートを整え横に座ると地面にこもった太陽の暖かさが感じられる。

「・・・明日は晴れですねえ。洗濯物がよく乾くといいですけど・・・」

「香喃の呟きに沙捲が吹き出す。

「お前そんなこと考えるのか？」

「え、だって夕焼けの次の日は良くはれるって・・・」

「まあ言うけどな・・・夕日見て洗濯物考えるってのもかなりの曲者だな」

不満そうに頬を膨らませる香喃を沙捲は余計に笑う。

「ま、ちゃんと干した方が気持ちいいしな」

「沙捲さんもたまにはやってくださいよ」

「おれはちゃんと洗濯機のスイッチを入れられるぞ」

「・・・それは常識の範囲内です」

自慢げに言ったその一言に香喃はがっくりとうなだれる。

この男は今の今まで洗濯機の使い方分かっていなかったのだ。

最初にやらせたときは粉洗剤と間違えて入浴剤を入れてワイシャツをまっピンクにし、また次の時は柔軟剤の代わりに色が似ているからと言って牛乳を入れた。

やっとこの頃洗濯機をしっかりと使えるようになったのだ。常識のようには思えるがこの男にとっては大きな一歩だ。

はあ、と小さくため息をつき香喃はそれ以上突っ込みを入れなかった。

「魔界にも夕焼けはあるんですか？たまーに太陽みたいなのが昇るじゃないですか」

「太陽じゃねえよ。第二の月だ。」
「・・・？」

香喃が首をかしげると沙捲が説明してくれた。

「いつも昇ってんのが第一の月。たまに魔界の時空の周期とぴったりに重なって出るのが第二の月だ。」

「へえー・・・」

香喃が感心すると沙捲はさらに続ける。

「第一の月は夕焼けにはならんが第二の月は青い夕焼けになる」
「いつ見れます？」

「周期はだいたい120年に一度だ。あと100年くらいでなるからその時は連れてってやる」

「ホントですか!？」

香喃が喜ぶと沙捲は頬を緩めた。

「第二の月にはいろんな言い伝えが合ってなあ・・・」
今日の沙捲は饒舌だ。
たくさん伝説を話してくれた。

そして決まって、いつか見せてやる、という。

香喃はそれに応じて楽しみにしてますね、と言葉を返した。

すっかり陽も沈み、ひんやりとした夜の空気が漂う。

「帰るか」

沙捲が差し出した手につかまり香喃は立ち上がった。

「そうしましょうか」

夜の帳の降りた帰路を二人はゆっくりと歩いて行く。

時折香喃が洗濯の衣服の色分けついて熱心に話す声と、沙捲がどれ
も同じだと一蹴する声が聞こえた。

「色分けは私がしますけど、干すの手伝ってくださいね」

「ああ・・・」

「明日、晴れるといいですね」

「そうだな」

終

夕陽の前でくるり舞う（後書き）

なんか初めてこういうの書きましたw
気恥ずかしw

なんか恋人みたいな雰囲気ですけど、二人とも師匠と弟子の関係です。

夜明けの晩に、逃げる影を捕まえて

夜明けの晩に、逃げる影を捕まえて

香喃の行く先を沙捲が歩いて行く。ここは何処だろう・・・？
学校の・・・廊下の様な一本道。

香喃は何故か解らないが凄まじい恐怖を感じていた。
背中に嫌な汗が伝う。

『・・・まって・・・待って沙捲さん・・・！』

後ろから何か来る。

そう気づいて初めて今の状況を理解した。

私は今何かに追われている。沙捲もきつとそう。

沙捲の姿がだんだんと遠くなっていく。

いくら足を動かしても地面が逆向きに動いているようで、まるで昇りのエスカレーターを下るようなもどかしさが募っていく。

いやだ、置いていかないで・・・

気づけば頬に涙が伝っていた。

・・・止まらない。

必死にそれを拭って走るが追いつけない。

沙捲は歩いているのに、まったく近づけない。

『置いてかれちゃう・・・！』

「待って沙捲さん！！！」

大きく息を吸い込んで香喃は飛び起きた。

自分の叫び声で目が覚めたのだ。

「・・・るせえなあ・・・」

沙捲の不機嫌そうな声が聞こえる。暗闇に目が慣れると沙捲がこちらを見ているのが分かった。

「あ・・・」

香喃は息をついた。

よかった、夢だ。

「何でもないです。すみません起こしちゃって・・・」

「んー・・・どんな夢見んのも自由だけど明日学校だからな。寝坊するなよ」

悪夢を見ていた事を見透かされ香喃は目を泳がせる。

「・・・」

あんたに言われたくない、とでも呟こうとしたが何故か声を聞いて安心してしまった。

安心するとそれと同時に眠気が襲ってくる。

今度は夢も見ない深い眠りについた。

案の定。

香喃は起きられず、沙捲は毎度のことで寝坊。

昨日の夢の事もあり、香喃は沙捲の「じゃあ今日休んで魔界に行くか」という言葉に惹かれてしまった。

「なんの夢を見た？」

魔界でゆつくりと観光込みで歩いていると沙捲が唐突に聞いてきた。

「たいしたことじゃないですよ」

笑ってみたが動揺が隠せない。

「どんな？」

とても言えない。ばーか、と笑われてしまう。

「・・・Ｔシャツに色移りする夢です」

「嘔吐きだな」

ぼそつと言われ香喃はムツとする。沙捲の言っていることに間違えはないのだが、なんとなくムカつく。

「嘘じゃないですよ」

「だって」沙捲さんまって”ゝとか叫んでたくせに”
呼ばれたから起きちまったじゃねえか、とぼやく。

「なっ・・・！」

くすくすと笑われ香喃は真っ赤になった。

耳まで赤くした香喃を見ながら沙捲は笑う。

「沙捲さんが・・・また色もののセーターを・・・！」

そうごまかしてみるが沙捲は馬鹿にするように眉を上げた。

「”まって、置いていかないで。お願い待って沙捲さん”ゝ」
わざとらしく語尾を伸ばし不敵に笑う。

『ム・・・ムカつく・・・！！！！』

香喃の額に青筋が立つ。

沙捲はそれを見て笑うと思いきや真剣な顔になった。

「本当に何の夢をみた？」

「そんな関係ないです。」

むかむかと来ていた香喃はぷい、とそっぽを向いた。

なんでこの人はこうもしつこいのだろうか。

「俺を起こした罰だ」

「起きなきゃいいじゃないですか」

「お前に名前を呼ばれたんだ」

「無意識ですよ。いつもは待ってなんてくれない癖に。」

「・・・言ったな・・・」

こうして言い合いを繰り返すとだんだんと波立っていた心が落ち着いてくる。

だがそれとは逆に口調が荒くなる。

「だから、置いてかれたんですよ！あなたに！！」

「・・・」

「どうせ子供っぽいとか、迷子になるのは得意だな、とか言うんでしょう？足が遅いとか、ただ追いかけるなんてどんだけ馬鹿なんだ、とか」

「今全部取られた」

ほらみる、とぼやく。

今自分がどんなに情けない表情をしているのかと考えると顔をそむけたくなった。

沙捲はしばらく考え事をしているようだったが香喃を覗き込んでニヤリと笑った。

「よいい。」

沙捲はスタートのポーズを取った。

「はい？」

香喃はぱちくりと瞬きを繰り返す。

「ドン」

「は！？」

そう自分で声をかけると沙捲は走り始める。

「え？え？なに・・・！？」

戸惑っている間に沙捲は遠くなる。

香喃は思わず走る。

あの夢と同じだ。

遠くなっていく背中。ただ今日は後ろから追ってくるものがないが。
「まっ・・・」

まっで、という言葉が引つ込んでしまった。

またその言葉を聞いてくれなかったら足が止まってしまっ気がする。
無言で追いかける。

香喃も足は早い方だが沙捲はそれ以上に早かった。

なんでこんなことをするのかわからない。

それ以上に馬鹿にされているようで腹が立っだし、じわりと泪がにじむ。

沙捲が振り向いた。

止まってくれる、と思ったがべーっと舌を出された。
ぷっん。

何かが切れた。

「待ってください沙捲さん!!」

この状態で敬語が出たのは自分でも褒めてあげたい。

すると走っていくと思った沙捲がぴたりと止まった。
勢いのついていた香喃はそのまま沙捲にぶつかる。

「っ・・・なんでっ・・・ハアッ・・・急にっ・・・」

「だって待てって言ったじゃねえか」

息一つ切れていないこいつが憎い。

「そうじゃ・・・っ・・・なくっ・・・」

理不尽すぎて涙がにじむ。

だが少しして気づいた。

安堵感が広がれば広がるほど涙腺が緩んで泪が出てくる。

沙捲はそれを黙って見ている。

憎らしくて睨んでみると笑われた。

「待ってくれない癖に、じゃねえよ。」

「・・・まさかそれだけにために・・・」

「ああ楽しかった」

「この腹黒男」

「あ？」

「・・・ぶわあーか!!」

思いつきり叫んだ。

「ああすつきりした。本気で嫌な夢だったんです。ほらあの・・・」

昇りのエスカレーターを同じ早さで永遠に下ってるみたいなの。」

「・・・想像するだけでイラつく」

そりゃあ短気な沙捲には地獄の様な責め苦になるだろう。

だが意外と香喃は晴れやかだ。

不思議とすつきりした。

あの黒靄のような不安感は無かったし、なによりも”待っていてくれる”ことが分かった。

焦りといきなり走ったことで汗ばんだ頬を拭い、沙捲をにらむ。

「この落とし前はちゃんと付けてもらいますよ」

「はあ？」

「小指^{エンコ}つめてフライパンで炒めて食べさせてやりますよ」

「お前が食べ」

ケラケラと笑われ香喃もつられる。

「甘いもん食いてえな」

沙捲がぼそりとつぶやく。

「沙捲さんの奢りなら行きます」

しょうがねえな、という言葉に驚いてたちどまる。

いつ槍が降るのだろうか。天気予報は晴れだと言っていた。

「ほんとに奢りですか？」

「ああ。」

「ほんとに？」

「ああもうつるせえな。んなこといってつと食わせねえぞ？」

「嘘です嘘！信じてますから！」

ぎゃーぎゃーと騒ぎながら二人は暗い魔界を歩いて行った。

夜明けの晩に、逃げる影を捕まえて（後書き）

もつドランプです。”ド”が付きます。ド級です。

一回逆向きのエスカレーターに乗った事があります。

恥ずかしくて悔しくて標識書いとけよ！って思ってた（普通はわかるんですけど）一気に駆け下りました。（階段自体は昇ってましたけど・・・）

超白い目で見られました。貞子ちゃんなみの白い目です。

なんかテンションおかしいですけど気にしないでください。

Writer's highですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1077z/>

さよならを知らない世界

2011年12月5日23時48分発行